遠藤周作『影に対して　母をめぐる物語』を読む（新潮文庫）

令和七年五月三十日（金）　杉並三田会読書会　楠　喬太郎

*テキストの「影に対して」「影法師」を中心に取り上げる。

一　周作の生涯のテーマ

①キリスト教の勉強をすればするほど、私は彼らと自分との間の距離感というものをかえって深めていったのである。

②（自分だけのテーマ）私にとって距離感のあるキリスト教を、どうしたら身近なものにできるかということであり、いいかえれば、それは母親が私に着せてくれた洋服を、もう一度、私の手によって仕立てなおし、日本人である私の体に合った和服に変える、というテーマであった。

③もし心理が第一のディメンションであり、心理の背後にある無意識が第二のディメンションとするならば、第三のディメンションに指を触れなければ、人間の内部を描くことができないという気持ちが、小説家としての私の中にある。（心理の背後にある無意識の、さらにその背後に魂の領域があって、その領域に肉薄しなければ、人間の内部をすべて描けないという気がする。）　「異邦人の苦悩」（『キリシタン時代』小学館）

④日本人もこの点、たしかに神を求めてきた。ただその神がいかなる神であったかが大切なのである。おそらくその神は汎神的な自然であり、あるいは堀田善衛氏の言う情緒、日本的な何ものをも曖昧に溶かしてしまう特殊な美的感覚だったであろう。

（『切支丹時代　殉教と棄教の歴史』小学館ライブラリー221）

⑤人間の罪の意識、欲情の深淵をのぞくことによって、人間の根源に、神を求める意志の必然性を見出すことです。サディズムが小説の主題としての意味を見出す場所であり、『白い人』や『アデンまで』にはこの主題が強く押し出されています。

（山本健吉『白い人・黄色い人』の解説<新潮文庫>）

⑥〔ガンジー〕「さまざまな宗教があるが、それらはみな同一の地点に集まり通ずる様々な道である同じ目的地に到達する限り、我々がそれぞれ異なった道をたどろうとかまわないではないか。」

「「さようなら」担架の上から大津は、心のなかで自分に向かって呟いた。「これで・・・・・・いい。僕の人生は・・・・・・これでいい」」（『深い河』）。*周作晩年の心境か

二　周作略年譜

*「影に対して」を読むうえで参考にする事項のみを記載。*文芸別冊『遠藤周作』の山根道公「遠藤周作年譜」を参考にした。

一九二三年　大正十二年　〇歳　三月二十七日　東京市巣鴨で、父常久、母郁（郁子）の次男として生まれる。父と母は学生時代に結婚し、当時二十六歳の父は東大法科卒の銀行員で、二歳上の母は上野東京音楽学校（東京芸術大学）ヴァイオリン科卒で安藤幸（幸田露伴の妹）に師事し、次いでモギレフスキイの弟子となった音楽家であった。

一九二六年　大正十五年・昭和元年　三歳

父の転勤に従い満洲の大連に移る。

一九二九年　昭和四年　六歳

大連市の大広場小学校に入学。母のヴァイオリンの練習姿に感動する。九歳ごろから父母の不和に悩まされる。愛犬のクロだけが悲しみの同伴者になる。

*この作品では大連の話題があまり出てこないことに注意。

一九三三年　昭和八年　十歳

父母の離婚により、母に連れられて兄とともに帰国し、六甲小学校に転校。熱心なカトリック信者の叔母の勧めで母とともに、夙川（しゅくがわ）カトリック教会に通う。

*この作品では母が一人で帰国することに注意。

一九三五年　昭和十年　十二歳

六月二十三日　母に続いて周作兄弟も夙川カトリック教会で受洗。洗礼名ポール（パウロ）。一九三九年頃、小林聖心の修道会のミサに毎朝通う母は、イエズス会の青年神父ペトロ・ヘルツォグの指導の下、厳しい祈りの生活を始め、その母からこの世界で一番高いものは聖なる世界であることを教えられる。

*中学生の頃、日本の教会が戦争に眼をつぶっていることなど宗教上の疑問を抱く。（『私にとって神とは』105）

*教会への不信（「殺すことなかれ―十戒」を守らない）は、『女の一生』第二部「サチ子の場合」に詳しい。

一九四二年　昭和十七年　十九歳

此の頃、高校受験に失敗、経済的負担を母にかけないために、再婚している父の世田谷の経堂の家に移った。母を裏切ったといううしろめたさを日々感じる。

一九四三年　昭和十八年　二十歳

*この間、上智大学予科に入り、父の家を出て母との絆と信仰を回復する。

四月　慶応義塾大学文学部予科に入学。吉満義彦が舎監の信濃町のカトリック学生寮の白鳩寮（聖フィリッポ寮）に入り、吉満から哲学よりも文学に向いていると助言される。亀井勝一郎、堀辰雄を紹介される。

一九四四年　昭和十九年　二十一歳

三月　信濃追分に病床の堀辰雄を月に一度訪ねるようになる。

徴兵検査を受けるが、肋膜炎を起こした後のため第一乙種で、入隊一年延期になる（終戦を

迎える）。

此のころカトリック作家の問題に触れた佐藤朔『フランス文学素描』を見つけた。フランス語を独学で勉強した。

*遠藤周作が作家となる大きな転機と言ってよい。

*此の頃「メリノの歌」執筆、「狐狸庵亭主敬白」と記載。この項山本雄一さんのご教示による。

一九四五年　昭和二十年　二十二歳

四月　慶応義塾大学仏文科に進学。病気療養中の佐藤朔の自宅で講義を受けるなどして、モーリヤックやベルナノス等のフランスの現代カトリック文学への関心を深めてゆく。

一九五〇年　昭和二十五年　二十七歳

六月四日　戦後最初の留学生としてフランスの現代カトリック文学研究のためフランス船マルセイエーズ号で横浜港を出航。同じ四等船客にカルメル会修道院で修行をめざす井上洋治がいた。七月五日　マルセイユ上陸。九月　リヨンに移る。距離感のあるキリスト教を身近なものにするという自分だけのテーマを背負って小説家になろうと決心する。

一九五一年　昭和二十六年　二十八歳

原民喜自殺を知らせる手紙と遺書を受け取り、衝撃を受ける。八月　モーリヤックの『テレーズ・デスケルー』の舞台ランド地方を徒歩旅行。井上洋治を訪ねる。十二月　血痰のでる日が続く。

一九五二年　昭和二十七年　二十九歳

六月　多量の血痰を吐き、九月まで、スイスとの国境近くのコンプルーの国際学生療養所で過ごす。パリ高等師範学校やソルボンヌ大学哲学科の学生と親しくなる。十月　パリの日本館に移る。コンプルーで知り合った友人たちと親交を深める。十二月　肺に影がありジュルダン病院に入院。

一九五三年　昭和二十八年　三十歳

一月　帰国のため退院し、ソルボンヌ大学哲学科女子学生フランソワーズ・バストルとマルセイユまでの旅を共にする。二年半の滞仏を終え帰国。父の経堂の家に戻る。

十二月二十九日、母郁が脳溢血で倒れ、突然の死去（五十八歳）。愛着を強く持っていた母の孤独な死はのち迄影を落とす。母を孤独の中で死なせてしまった後ろめたさを持ったと思われる。

一九五四年　昭和二十九年　三十一歳

「マルキ・ド・サド評伝」（『現代評論』創刊号）発表。

一九五五年　昭和三十年　三十二歳

七月　「白い人」（近代文学）により第三十三回芥川賞受賞。

一九五七年　昭和三十二年　三十四歳

六月　「海と毒薬」（文学界）発表。

一九六一年　昭和三十六年　三十八歳

慶應義塾大学病院で肺結核のため三度の手術を受ける。手術の前日、紙の踏み絵を見る。

一九六四年　昭和三十九年　四十一歳
春に長崎を旅行して十六番館で黒い足指の痕のついた踏み絵を偶然見た。
一九六六年　昭和四十一年　四十三歳
書き下ろし長編小説『沈黙』を新潮社より刊行。
一九七三年　昭和四十三年　五十歳　『イエスの生涯』を新潮社より刊行。
一九七四年　昭和四十四年　五十三歳　「母なるもの」刊行（『新潮文庫』に同時期の「母」関する短編集が収録されている）
一九七八年　昭和五十三年　五十五歳
九月　『キリストの誕生』を新潮社から刊行。
一九九三年　平成五年　七十歳
六月　最後の長編小説『深い河』を講談社から刊行。
一九九六年　平成八年　七十三歳
九月二十九日　午後六時三十分、肺炎による呼吸不全により慶応義塾大学病院にて逝去。

三　「影に対して」

着眼点　①「影に対して」は何故未発表作品だったのか。遠藤周作記念館の収蔵資料の中から清書されたまま発見された。発見後、『三田文學』２０２０年夏季号に掲載された。
②「影」とは何を指し、何を意味しているか。
この作品には「イエス」「神」は、直接は出てこない。「影」「神」については後述**四　周作の「神」**をご参照願います。疎外される母、求道者（激しい女）としての母、弱い勝呂・母を裏切る勝呂。俗物の父・伯母・勝呂の妻（聖と俗の対比）を念頭に以下読み進めていただきたい

注・▽引用文を示し、末尾に文庫本頁数を表示。⇩は解説文。
▽（彼は自分も写真をとられる時、この父と同じように、気の弱そうな微笑を頬に浮かべることをふと考えた）そして、それらの写真のところどころに、あきらかに前にそこに貼りつけてあったのに、剥ぎとった痕があった。糊のあとだけが灰色に乾いて残っている。９
⇩母は義母から疎外され、父は容認している。「気の弱そうな父」は「影」である。
▽書棚には仏教訓話集や成長の家の全集が並べられ、机の上には筆立てやハンコや大きな銅の文鎮がおいてある。・・・それは父の今日までの変化のない生活をあらわしているようである。１４
▽「何の書き物ですか」「李商隠の伝記といったものだ」「いずれ本にして出したいと思っている」「自分としてはまあ、A社などいいと思っている」１６
⇩「備えあれば憂いなし」を座右の銘とする現実派。株を買い、老後保険に入り老後に備えている。俗物として描かれている。
⇩李商隠（りしょういん）は杜牧と共に晩唐を代表する二大詩人とされる。数々の「無題」の詩は、酬いられぬ恋の悲しみを象徴主義的、耽美主義的とでもいうべき手法で告白

したもの。晩唐の詩に明治の人は異常なほど愛着を持っていたという。

楽遊原

晩（くれ）に向（なんな）んとして意適（こころかな）わず、
車を駆って古原に登る。
夕陽（せきよう）　限り無く好し、
只だ是れ　黄昏（こうこん）に近し。

常蛾（じょうが）

雲母（うんも）の屏風（へいふう）　燭影深く、
長河　漸（ようや）く落ち　暁星（ぎょうせい）沈む。
常蛾は応（まさ）に霊薬を偸みしを悔ゆるなるべし、
碧海（へきかい）　青天　夜夜の心。

⇩何事も平穏無事を信条とする父は仏教訓話集、成長の家の全集を愛読する俗物であり、かつ李商隠の詩に傾倒することを勝呂は嘲笑している。

▽母はなぜ、父と別れたのだろうか。・・・しかし、勝呂の心の中で、彼女の思い出が美化されれば美化されるだけ、彼には父にたいする軽蔑感と共に、母が去っていった理由を具体的にできるだけ突きつめたかったのである。１８離婚の理由は不問である。

▽母の従兄の「達さん」・・・母は卒業後、東京の上野の音楽学校に入学したい気持ちを持っていた。しかし両親にはげしく反対されると、彼女はある日、突然家を出てしまった。東京の音楽学校でヴァイオリンを勉強する旅費と当分の生活費を作るため、姫路のある家庭で女中になったのである。・・・「まあ、芯が強かったんやろうが」・・・彼は眼をつぶってまぶたの裏にある母の影像をたぐり寄せた。２０

⇩誰にも理解されない、母は孤独。母は「激しい女」。

▽（芯は臆病な意志の弱い性格）あれはひょっとすると妻の批評かも知れなかった。２２母からゆずってもらったものが何かはまだ言えないが、父から受けついだものは、わかるような気がする。猫背の姿勢や、とも角も何とかやっていける毎日にすみついてしまおうとする自分の臆病さや弱さーあれは父ゆずりのものなのかも知れない。彼はそういう風に傾いていこうとしている自分を軽蔑し、軽蔑では足りず、そんなときの父を嫌うことで抵抗しようとしていた。５・２６

⇩母のように強くなれない自分（「母」へのあこがれとなる）、反面、「備えあれば憂いなし」を信条とする父の性格（影）を自覚している。

▽あの小心な性格は、旧制高校の教師という職を失わないために、とても妻以外の女に手を出すことなどできなかった筈だ。母はいわゆる世間的な意味では父に裏切られた筈はなかった。（だが父は別の形で母を裏切ったのだろうか）２７

妻は手を動かしながら言った。「欲を言えばきりがないわ。でもあたし、結局、何も起こらない、ということが一番、幸福なんじゃないかと近頃おもっているの」２８

⇩父母の離婚の理由を考える。勝呂は妻の俗物性に父の影を見る。

▽だが三十年前、子供だった彼の前で、三時間も四時間も一つの音を探り求めようとしていた母の姿や、まるで機械のように弦の上を休むことなく動きつづけていたその手や、皮のように潰れた指先を幾十回となく思い出すにつれて、それは勝呂にとってたんに懐かしさ以上のものになってしまった。眉を不満そうにしかめ、飽くことなく一つの旋律を追い求めていた母。音の旋律ではなく、それ以上の旋律を自分の爪ではじき出そうとしていた母。３１

⇩ひたすら求める母。「わが魂をなんじに委ねたてまつる」のイエスを彷彿とさせる。

▽「・・・お前が自分で小説家になりたいなら、明日からでも自分で食ってみるがいい」・・・それがたんに息子に対する説諭でなく、母にたいする軽蔑が暗にふくまれているような気がしたからだ。３４

⇩「俗」と「聖」の対立。民衆はイエスにパンとローマの圧政からの解放を求めていた。その要求が満たされないと見た民衆はイエスを見捨てた。民衆だけでなく十二使徒も逃げた。無力なイエス。見捨てられたイエス。

▽そう、母は彼女の住んでいる貧しいアパートで誰からも看とられず死んでいった。知らせを聞いて勝呂が駆け付けた時は、母の死体のそばには電話をかけてくれた管理人のおばさんが一人、おろおろとして坐っているだけだった。血の気もなく紙より青白くなったその死顔の眉と眉との間に、苦しそうな暗い影が残っていた。３４

⇩母マリア、マグダラのマリアなど女性の弟子は最後までイエスのそばを離れなかった（管理人のおばさんの存在に留意）。「聖書の女性には、二つの型がある。ものすごく激しい女、その激しいものを通してイエスに接近した女、一方は、自分の悲しさ、苦しみを通してイエスに接近した。・・・こういう煩悩や執着が逆に彼女たちを神に接近させている・・・。また、こうした女たちをだんだん総合していって、それを清めていったものが、聖母マリアだと思います。」（『私にとって神とは』光文社８９・９０）。勝呂の中で「母は復活する」ことを暗示されていると思われる。

⇩「苦しそうな暗い影が残っていた」母の死顔は、『深い河』の女神チャームンダー（遠藤の創作）に通底している。「彼女はそんな病苦や痛みに耐えながらも、萎びた乳房から人間に乳を与えているんです」「彼女は印度人と共に苦しんでいる。」。「ヨーロッパの聖母マリアとちがった印度の母なるチャムンダーなんです」

⇩「ガンジス河を見るたび、僕は玉ねぎ（キリストのこと）を考えます・・・玉ねぎという愛の河はどんな醜い人間もどんなよごれた人間もすべて拒まず受け入れて流れます」。母の死顔の描写は周作文学の重要なポイントである。

▽その年、母の演奏会が青年会館で開かれた。・・・人影のない廊下に出ると、ガランとした椅子に父が一人、壁に向き合ったまま腰かけていた。その時の父のうしろ姿には、だれからも相手にされない、寂しそうな翳があった。４０

▽父の姉夫婦が奉天から大連に移ってきたのはこの入院中である。勝呂が二十数年たった今でも憶えていることは、病院で、伯母と母との間で行われた言い争いである。・・・伯母

は金歯のいっぱいはいった口をとがらせながら、「ヴァイオリンもいいけれど、女はまず家をまとめるのが仕事だと思うけどね」42　「この子が病気になったのも」伯母はたたみかけるように「あんたが音楽ばかりにかまけて見てやらなかった為じゃないかい」43

⇩金歯の伯母は俗物そのものの印象を受ける。「命の衰えた者が命のあふれた女子高生に抱く憎しみがそこにあった。自分がもう失ってしまったものへのあさまし執念と、充実している存在を傷つけたいというサディズムが無意識から怪物のように姿をあらわし、形をとったにちがいなかった。」(『夫婦の一日』新潮社 117)。「捕らえられたイエスを嘲笑する群衆のなかに私は一人の老人の姿を発見する。イエスは血や泥でよごれたまま温和しく連れていかれる。抵抗もしない。眼をふせている。しかし老人の前で顔をあげる。老人を見た眼はきよらかだった。少女のようにきよらかだった。永遠に消えぬ純粋なものの前に老人はたじろぐ。それが老人の嫉妬心をかりたてる。彼は思わずイエスに唾をはきかける。せめてその肉体だけでも辱めるために、・・・・。」119 同書。

伯母も父もひたすらヴァイオリンに打ち込む母に、嫉妬心を感じていたのではないか。まっすぐに進む（キリストの清らかな眼）母に、唾するサディスティックな振る舞い。

▽烈しい雨が降った。・・・縁側にたった勝呂は急に悔恨とも自責ともつかぬ感情が胸をつきあげてくるのを感じた。突然なぜ、そんな感情に捉われたのかわからないが頭のどこかでお前の生き方は嘘だという声が聞こえてくるようだった。57

▽あの時、たとえ学校などに行けなくとも、母についていくべきだったのに、その母を見捨てた自分の弱さ、卑怯さが苦しいのである。60

母を見捨てた自分がみじめで汚れて卑怯者だという気持ちを、背中で痛いほど感じながら、彼はランドセルを背中にかけた。62

⇩拒絶しないことは罪つくりの共犯者である。勝呂は何度も母を裏切る。ペテロの否認を想起させる。勝呂は「沈黙」のキチジローが重なる。「お前の生き方は嘘だ」と勝呂は母の持しめるものに開眼した（母の復活）。

▽結婚生活の間は、父を軽蔑していたためか、まだ温和しく冷ややかな笑いしかうかべなかった母は、離婚後、年をとるにつれて怒りっぽくなっていった。時にヒステリックにさえなっていた。そのことを彼は思いだしたくはない。しかし、母の人生をたどるためにはやはり思い出さねばならぬ。・・・彼はこの学校をやめさせられた時の母の姿を想いうかべた。・・・教養のための音楽などは存在しなかったにちがいないのだ。66・67

▽「母さんに会いたかろうが・・・」声をひそめて言った。「心配せんでええよ。いつか必ず会わせてやるからな。伯母ちゃんに委しときなさい」　だがその伯母の言葉には、どちらにもいい顔をしようとしている狡さが感じられ、うつむいたまま勝呂は返事をしなかった。68　「節さんはどこに行ってもうまくいかんらしいな。もう勤め先だけでも二つ変えた・・・」「人と妥協することを知らん女だから」68

⇩母も勝呂も理解してくれる人がいない。伯母の話は棄教を強いる（勝呂に「母」をあきらめさせようとする）役人のような狡猾さがある。父と伯母には母の行動が嘲笑すべきもの

としてとらえられている（道化と見なされている母）。良妻賢母の女性（伯母）は自分に不可解なことを拒絶し、時に軽蔑する。

▽しかしその年、彼は遂に会うことができた。母が東京から大阪に出てきてくれたのである。久しぶりで見る母はひどく疲れて青い顔をしていた。彼を見た時、母は頬に泪をながした。・・・「なんでもいいから」母は彼にむかって言った。「自分しかできないと思うことを見つけて頂戴」「母さんがなんのために、こうして一生懸命いきてきたか、よく考えて頂戴」69　その時、何気なく聞いた言葉はくりかえし、くりかえし母のことを心に甦らすにつれ、なぜか彼にはただ一つの言葉だったように思えてくる。しかし、それはずっとあとでの話である。70

▽なぜなら勝呂は決して母を幻滅さすようなことを返事に書かなかったからである。・・・（あの時、なぜ母に嘘をついたのか）71

▽伯母が母のことをこの時、勝呂の前で節さんと呼んだのは始めてである。そして父の妻になる女性のことを新しいお母さんと言った。この言いかたは、勝呂の胸をひどく傷つけたが、彼は黙っていた。いやだとも言わなかった。自分が母を今、また裏切りつつあることを感じながら黙っていた。・・・・・・結果的に自分が母を一歩一歩孤独にさせ、見棄てる生活に落ちていくのも事実だった。72

⇩官憲の追及に対して、イエスの弟子は否認して裏切った。勝呂は母への手紙でも嘘をつき、伯母の言葉を拒絶していない。孤独な母。弱い勝呂。

▽「昨日、母さんはSさんの音楽会に行ってきました。」「Sさんはテクニックだけで弾いています」75　「テクニックだけのことなら、練習で誰でもうまくなれますが、音楽にはもっと高い、もっともっと高い何かがあるのだと母さんはいつも思っているのです。」「母は自分に余りに期待しすぎている。彼女が歩いたと同じ人生を彼に要求する。それが愛情で裏づけられているだけに彼にはいつしか重荷になっていた。彼の身体には母の血も流れていたが、同時に父から受けた性格もまじっていた。」76「母さんは他のものはあなたに与えることはできなかったけれど、普通の母親たちとちがって、自分の人生をあなたに与えることができるのだと――それを今はあなたにたいするおわびの気持ちと一緒に自分に言い聞かせているのです。」77

⇩母は音楽に「もっともっと高い何か」を求めている（魂？）。勝呂の中で母なるものと、父なるもの（血の流れ）が葛藤している。母の愛情を感じながら、その求めるものが重荷でもあった。「聖」と「俗」の対立。平穏なアスファルトの道でなく、困難ではあるが足跡の残る砂浜を歩めと勝呂を諭す。

▽しかし母の教え子である鮎川さん、母の音楽学校時代からの友人であるSさん、その人たちまで今は母の生き方を蔑むような言い方をするのが耐えられなかった。・・・あなたたちには母の生き方がわかるまい。あなたたちがわからなくても、子供のおれにはわかると彼は呟きつづける。82

⇩イエスは十二使徒にも裏切られた。母は音楽仲間にさえ理解されなかった。

▽「親爺なんかには借りたくない」「言いますとも、あなたなんか、お父さまぐらいにも、なれないんじゃあありませんか」・・・母の青白い額にはまだ苦しそうな翳が残っていた。85

四　周作の「神」　（『私にとって神とは』光文社）

1、〔身体に合わせて仕立て直した宗教〕たぶん私は、母親に対する愛着が非常に強い男なものだから、母親が一生懸命だったものをむげに棄てるというのは、母親に対して申しわけないという気分が、どこかにあったのです。10

2、それで母親がくれたこの洋服を、おのれの身体に合った和服に仕立て直してみようと考えるようになったのです。11

3、〔夜半に目覚めて〕私は、自力で自分の人生のいろんなこが処理できない男だから、私の『侍』の主人公と同じように、大きなものに身体を預けてしまいます。「すべてを委ねたてまつる」（ルカによる福音書）――あの気持ちです。16

4、正宗白鳥さんが言っているのだけれど、人間には、人に知られるより死んだほうがましだと思うような秘密がだれにも一つはあるんだ、・・・・・。16

5、〔神の存在を感じる時〕神は直接目に見えるわけではないけれども、私という者を通してあなたに働きかけたことになる。神はいつも、だれか人を通してか何かを通して働くわけです。・・・神というものは対象ではありません。その人の中で、その人の人生を通して働くものだ・・・その人の背中を後ろから押してくれていると考えたほうがいいかもしれません。20

6、それにもう一つ、悪の中にも罪の中にも神の働きがあるということを言っておかなければなりません。21

7、〔神の働き〕では、神が私に対してどう働いてくれたかといったら、それは私の場合、母親というものを通して、あるいはそのほか私の人生において非常に関係の深い人々を通してという形で働いてくれました。26

8、〔人の行為を決定するもの〕仏が働いたり、キリストが働くのは、意識の世界ではなく、この心の奥底なのだな、と感じてきました。（注・魂）29

9、〔後ろから押すもの〕後ろのほうから、いろんな人を通して目に見えない力で私の人生を押して行って、今日この私があるのだということが分かってきたのです。31

10、私の母が母であった最も大きな理由は、彼女の中のキリストというのが私とつながっていた点です。33

11、〔イエスの最後の言葉〕日本では聖書にあるイエスの最後の時の「主よ、主よ、なんぞ我を見捨てたまうや」という言葉を、特にインテリなどがイエスの絶望の言葉としてとらえすぎていると思います。これは元来、詩篇二十二編の冒頭の句なのですが、それは三十一篇に出てくる「わが魂をなんじに委ねたてまつる」につながるのです。67

イエスは絶望して苦しんだがそれを超えて「すべてを委ねたてまつる」になることと、みんなは知らないのだから許してやってくれ、と言ったこと、この二つがイエスらしい言葉だと

思います。68

12、〔復活ということ〕イエスの本質てきなものがキリストで、その本質的なものが生き始めたということです。現実のイエスよりも真実のイエスとして生き始めたこと、これが復活の第一の意味です。・・・・今日まで私は自分の母やある人々によってキリスト教に結びついたのは、イエスが母やそれらの人々の人生を通して私をつなぎとめたから、という感じがあり、イエスは、やはりそれらの人々の中で生きている、復活している、と思ってきたからです。77（注・イエスは普通の名前、キリストは救い主の称号）

神の理念を人間の肉体を持って表したのがイエスです。79

13、〔裏切った使徒たち〕教えていることは結局「愛」だったということを知らなかったわけです。イエスはその「愛」を最後の死の苦しみのなかで身をもって教えようとしたのです。（87）

14、〔聖書の中の女〕一つは、新約聖書の中で立派だと思われている女性も、非常に激しい性格の持ち主だということです。・・・二番目は、男の弟子は、イエスのことがあまりわからなかったけれども、女性の弟子のほうがイエスのことがわかっていたように感じられます。89

イエスの母親も「マリア」、マグダラのマリアも「マリア」、ベタニアに住んでいたラザロの妹も「マリア」・・・これらのマリアが全部合わさったのが「聖母マリア」と考えていいかもしれない。91

烈しい女というのは、神や愛を知ることができるという考えが、そこにあるのだろうと思います。98

聖書の女性には、二つの型がある。ものすごく激しい女、その激しいものを通してイエスに接近した女、一方は、自分の悲しさ、苦しみを通して、イエスに接近した。いずれも、仏教のほうで言うと、煩悩や執着です。・・・その煩悩の中に神の働きがあるということ、それがキリスト教です。101

15、〔執着を捨てるか、超えるか〕私は死んだ母親に非常に執着します。・・・キリスト教では、母性に執着することが、いつの間にかマリアへのあこがれや同伴者のキリストに対する渇望になっていくという考え方にもなるのです。128

16、〔罪の考え方の違い〕キリスト教の場合の救いというのは、私の考えでは、自分の存在を純化することではないのです。神によって、またキリストを信じることによって、自分を聖化することです。148

五　周作の「母」（『母なるもの』新潮文庫） 注・「母なるもの」は昭和四十四年一月発表

1、平生、すぐに思い出す母のイメージは、激しく生きる女の姿である。・・・ヴァイオリンを顎にはさんだ顔は固く、石のようで・・・たった一つの音を掴みだそうとするようだった。16

2、小学校時代の母のイメージ。それは私の心には夫から棄てられた女としての母である。・・・・中学時代の母。・・・その頃、たった一つの信仰を求めて、きびしい、孤独な生

活を追い求めていた。18

3、母に嘘をつくことをおぼえた。26　・・・たしかにきびしい母にたいする仕返しがあった。27　やがて、一週に一度は行かなければならぬ日曜日の教会さえ、さぼるようになり、29・・・時折、私は母の財布をあける習慣がついていた。夕暮まで映画をみて、何食わぬ顔をして家に戻った。・・・母がそこに立っていた。物も言わず、私を見つめている。やがてその顔がゆっくと歪み、歪んだ頬に、ゆっくりと涙がこぼれた。30

4、切支丹時代・・・転び者の子孫・・・世間には嘘をつき、本心は誰にも見せぬという二重の生き方・・・私にも決して今まで口に出さず、死ぬまで誰にも言わぬであろう一つの秘密がある。40

5、・・・長い歳月の間に日本のかくれたちのなかでいつか身につかぬすべてのものを棄てさりもっとも日本の宗教の本質的なものである、母への思慕にかわってしまったのだ。私はその時、自分の母のことを考え、母はまた私のそばに灰色の翳のように立っていた。ヴァイオリンを弾いている姿でもなく、ロザリオをくっている姿でもなく、両手を前に合わせ、少し哀しげな眼をして私を見つめながらたっていた。55

五　終わりに

1「影に対して」は、周作の母を巡る記憶と体験を語ることによって、母を美化することに主題がある。そして『影に対して』の諸編を通して、母の記憶を示した。

加藤宗哉『遠藤周作』（慶応義塾大学出版会）によれば、周作は終生、母の遺影を肌身離さず所持した。郁が和服姿でヴァイオリンを右手に抱え、顔を正面に向けて笑みをみせているという。また、もう一枚の写真、「周作の蔵書のうちの一冊、ダニエル・ロップスの原書の百二十頁から、死の直後の母の写真が発見されたが、・・・郁は明らかに苦し気な表情を見せている。頬は歪み、左右の眉も寄せられたままである。」（『遠藤周作』）

夫、伯母、親戚、教え子から見捨てられた母。勝呂は「音楽より、もっと高いものを」を求める母の期待に応えられず反発し、時には裏切った。「弱者」は「強者」にはなれない。「人間にもし、強者と弱者があるとするなら、あの頃の貴方は本当に強い人だった。そして僕は意気地なしの弱虫だった。」（「影法師」151）。弱者の自覚は自分を追い詰め、罪意識に捉われる。しかし、母は弱者の勝呂を見捨ててはいない。母性回帰の念が生ずるとき、母に対する裏切りの罪意識は、必然的に罪の許しを求める。現実の生活に妥協しようとすると、「その時、まるで残酷な悪戯のように勝呂の頭にあの母の死顔が浮かんできた。」。45　「普通の親たちとちがって、自分の人生をあなたに与えることができるのだと――」77　勝呂は母の死に直面して、裏切られても、期待に添わなくとも許す母を直感した。丁度、弟子たちに裏切られても許したキリストを重ねたと思われる。「弱者」勝呂は許しを請うているのだが、祈ることによって聖化されてゆくものと思われる。

心に突きささったものは、ガンジス河と、そして江波が説明してくれた女神チャームンダ

―の癩にただれ、毒蛇にからまれ、痩せ、垂れた乳房から子供たちに乳をのませているあの姿である。そこには現世の苦しみに喘ぐ東洋の母があった。『深い河』281

女神チャームンダー（周作の創作）は、郁の臨終を想起させる。「母に執着することが、いつの間にかマリアへのあこがれや同伴者のキリストに対する渇望になっていく」。母は勝呂のマリアであり、キリストである。勝呂に働きかけるのは母（マリア）そしてキリストの「影」である。この作品に、キリストもマリアも登場しない。だが作品そのものが周作のキリスト観を示している。タイトルを「影に対して」とした所以である。限られた登場人物、自然描写など省略することによって「母を美化」することに、読者の関心を集中させる。母を取り巻く人を俗物化して、母を「激しい女」としてその聖性を惹起する描写になっている。

2「影に対して」は未発表作品であった。何故か？　「差し障りのある人が沢山いますしね。その人たちがまだ生きておる。まだ、書けません」（「六日間の旅行」109）。「のみならず私は小説家になる時、父から自分や家のことは絶対に書いてくれるなと言われた。その約束をした以上、たとえ父と義絶しても書けないものがあった」（右書、117）。これは未発表の理由として挙げられるものである。しかし、文庫本『影に対して』所収の諸編は母や家庭の事にかなり言及している（勿論、小説は虚構として読むべきである。「影に対して」は、おそらくこれらの諸編と同じ時期の執筆と思われる）。小説家が執筆の衝動に駆られたとき、要となる事柄に蓋をするだろうか？隠した本当の理由は他にあるのではないか。

結論から言えば、周作は母をマリア或いはキリストとすることに躊躇いがあったのではないか。カトリック作家として「影に対して」は直接的な宗教色を抑えている。それだけに読者は、母と勝呂の人生の響きあいを読み取る。弱者と同伴者の関係に引き込まれるのである。罪意識は必然的に人間の根源を求めることになり、それは神を求めることにつながると言えるのではないかと思う。

「影に対して」は「母」を通じて「母なる神」「許す神」を描き、日本人の根底にある宗教観を明らかにしようとした野心作である。

「深い河」を周作文学のカトリック的集大成とすれば、「影に対して」はその起点として位置づけられるのである。

大胆な推論をもう一つ述べる。

この作品の中核をなす俗物の父と「激しい女」母との離婚の経緯、母のバイオリンに対する求道的レッスンの意味、母の信仰体験について詳細は語られていない。従って作者の意図が読者に理解できるだろうかと言う疑念が周作にあったのではないだろうか？　「影に対して」の前後に母にまつわるもの、神に関する作品が多く書かれていることからも推察される。

参考文献

*『イエス伝』若松英輔　中央公論新社　*『不思議なキリスト教』橋爪大三郎、大澤真幸　講談社現代新書　*『教養としての聖書』橋爪大三郎　光文社新書*『教養としてよむ世界の経典』中村圭志　三省堂

山本雄一さんの質問に答える

山本さんの質問は文学の基本に係わる事柄です。今回の読書会で取り上げることは時間的に無理です。従って『影に対して』に絞って思いつくまま要点を示します。

質問の要旨　周作文学に於ける「元型」「物語性元型」、「作品協同体」は、周作作品にどのように表れているか？

前提　（遠藤周作『私の愛した小説』から山本さん引用部分を要約）

一、**「元型」**とは神話などに見られる、例えば「母なるもの」など各地の神話に共通する「集合無意識（ユング、ノイマン）」を言う。「元型」は単に「竜」のイメージを生むだけでなく、「竜の物語」を生む（**「物語性元型」**）。物語性元型もまた、無意識の中にある。（喬太郎注・性欲、権力欲といった衝動、神への恐れ、タナトス〈死への欲望〉、罪意識、伝統の中に培われた美意識などが考えられる。）

二、個人の体験など事が知れている。文学作品は先行する多くの作品の影響を受けている。つまり「作品の協同体」の「重層性」（喬太郎注・古典を含め多くの作品から影響を受けている、という意味）があって自分の作品が書ける。作品の奥には「芯とも言うべき物語性の元型」がある。作品は古典ともつながる層があり、更にその奥に元型がある。

回答（『人生の踏み絵』新潮文庫。数字は頁を示す。）

*人間の内部には色んな音や色があって、それをずうっと追いかけているうちに、心理よりももっと奥にあるもの、無意識よりももっと背後にあるもの、そんな第三のディメンションに迫っていきたいというのが、キリスト教作家のひとしなみの気持ちだろうと思います。178

*さらに心理や無意識の向こうに、キリスト教でいう魂の世界というものがあるならば、これはさらに混沌として、われわれには分析不可能でしょう。86

*人間の汚れた部分、ドロドロした部分、目を背けたい部分・・・そこを突破して、アウフヘーベンして、より絶対者へ向かう志向を人間のどろどろしたものの中から見つけることが、キリスト教作家の一つの仕事となるのです。98

*汚れた罪深い部分でも、人は神を求めるし、神はそんな部分にあえて潜んでいる、そんな人間にこそ近づいて行いく。99

⇩　周作には**「元型」**として「母なるもの」があり、その奥に「さらに混沌としたもの」＝「魂」＝神を措定している。「母」「母の愛」への渇望がある。同時に周作は母を裏切ったことに「罪意識」（人には言えない秘密がある）を持っている。勝呂は『聖書』の

「弱虫」の視点で描かれている。罪意識は漱石で言えば「登世」がこれに当たる。

⇩「影に対して」はエディプス・コンプレックスと「愛欲」を巡る小説とも読める。

*エディプス・コンプレックスは、異性の親に愛着し、同性の親を憎む感情を言う。

*・・・愛欲というのは相手を所有する気持ちだとなる。相手の本当の姿が欲しいから・・・まだ相手を所有したという気持ちになれない。そこで例えばサディズムとか、マゾヒズムなどが起きる。96　⇩ 周作「白い人」（芥川賞受賞）がこれに当たる。

* 父母の離婚の原因は父の「妻を所有できない」ことから来るサディスティックな行動。伯母や取り巻く親戚の者たちのまなざしは、崇高なものを貶めたい欲求を表している。一方、愛欲は「絶対者を欲しがる気持ち」を持つという。モーリヤック。97　母はヴァイオリンで最高の音律を求めたし、熱心なキリスト信者になった。勝呂に「自分にしかできないと思うことを見つけて頂戴」と言う。「愛欲の中には自己放棄や自己犠牲という欲望がある。」。　「離婚と自殺が禁止されているのは、そこに愛がないからです。・・・捨てないということが愛だ」。イエスは十字架を背負い通した 110 母を捨てた父を勝呂は許さない。

*母は「激しい女」で、『聖書』のマリア。『女の一生』に「キクの場合」「サチの場合」として描かれる。自己犠牲は『わたしが、棄てた・女』にミツとして描かれる。イエスは「無力の人」「誰も彼を理解しなかった。」ことは母のイメージと重なる 164 。

「物語性元型」　『影に対して』の各編は「聖書」を取り込んでいる。

⇩ 西欧人には三人の象徴的な女性像が存在している。①聖母マリアは女性の精神的な清らかさや純潔、母性の象徴。純潔の尊さや高さはキリスト教と結びついている。聖母マリアに近づくため。「影に対して」の母。漱石「こころ」妻・静。②イブは女性の暗い部分。悪の原型。③ヴィーナスは女性の肉体的美。　（『聖書のなかの女性たち』）

⇩ 現在と過去の記憶をフラッシュバックさせる小説手法。タイトルが作品の意味しているものを象徴する手法。母の苦し気な死顔、管理人のおばさんなど「聖書」。切支丹ものは高瀬弘一郎など先学の研究成果を踏まえている。

「狐狸庵」について。ペンネームは別人格になる事である。

身の底の底に火がつく冬の酒　川上三太郎

貧しさも余りの果ては笑い合ひ　吉川雉子郎

わんとはし持ッて来やれと壁をぶち　誹風柳多留

*周作は「東海道中膝栗毛」を愛読したが、江戸文化であり川柳の世界でもある。

「神」など重たい思索（底の底）は周作の実名で、思索の果ては笑いのめす別人格（狐狸庵亭主）が求められる。*日本人の深層には自然信仰がある。自然を中心とした

「万物一体」、及び「生々流転」の考えが強く、人間は自然の動きに合わせて生きるのが良い、とする。人間対自然という対立構図ではない。*日本人は現実的、実際的であって神話や祝詞などは現世を謳歌し、現世の幸福を祈るが、死後の世界はあまり気にしない。仏教も現世的傾向を帯、現世利益の方便とされた。日本にキリスト教がなかなか定着しない精神的背景。

以　上